
僕等 ～約束～

李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕等 ～約束～

【Nコード】

N0655A

【作者名】

李

【あらすじ】

『僕等』の続編です。登場人物が増えて、茗と羽稀との再会後を書きました。

第1話：クラスメイト（前書き）

ども、すももです。『僕等』の続編ですっ！イエーイ！ちょっと夜遅くまでかかって頑張って書きました！では本編をどうぞ！

第1話：クラスメイト

俺は

あの日からずっとあいつに会える事を待ち望んでいた。

『…私、絶対に早くに帰ってくるから…っ。浮気とかしないで待っててよね』

もう、俺は何年もあいつを待ちつづけてる。

…何年もっていうのは少し大げさだけど、中学二年に初めて出会った頃からは、すでに三年の月日が流れていて、俺はもう高校二年生になっていた。

— 人はどうして誰かを好きになるんだと思う？

— 人はね、一人じゃ生きられないから、誰かを好きになるんだよ

「俺も茗が居ないと生きるのいっぱいいっぱいなんだから、早く帰って来いよな……」

羽稀は、暖かい日差しをうけながら屋上に居た。

「俺はいつまで待てばいいんだろう？」

ふいに羽稀は、先の見えないような絶望感に襲われる時がある。このまま大人になるまで会えないのかと思うと気分が沈み、勉強なんか頭には入らないし学校に行くのも憂鬱になる。そういう時に羽稀は、ひたすら『早く大人になりたい』と願うのだった。

羽稀はその場に寝転がり、青い空を眺めた。気分が鬱する時は、何も考えずに空を眺める事が一番効果的なんだという事を羽稀はわかっていた。そのままウトウトし始めた時に授業のチャイムが鳴った。(あ…そっか。五時間目のチャイムじゃん…。面倒だからいつか…)

そのまま羽稀は眠気に逆らう事なく眠り続けようとした。

「羽稀ー!!」

突然背後から声がして、羽稀の眠気はすっかり覚めてしまった。羽稀はその瞬間にほんの淡い期待を抱いていた。このまま後ろを振り返ったら、茗がいるんじゃないかと。

しかし、羽稀がゆっくりと振り返ったと同時に、そんな淡い期待はどこかに行ってしまうのだった。

「羽稀!こんなとこで何やってんのさっ。授業始まってるよっ!」

「…なんだ、藤峰か」

「あつ、何だよその言い方!かなり失礼じゃない?」

振り向いたそこに居たのは、クラスメイトの『藤峰 紗織』だった。

いつも何かつていうと、俺につっかかってくる女んだけど、男っぽくて男としては話しやすく男友達的な存在としては人気者ではあるかも。

「ハイ、ハイ。つーかお前は人の事言えんのかよ」

「…なにが?」

「授業さぼってんじゃない」

「あたしはいーの。羽稀はダメっ」

「…なんじゃそりゃっ。むちゃくちゃだなー…つーかさっきから呼び捨てすんなよ」

「あつ。…ばれた?ごめん、ごめん。ほんの悪戯のつもりだったん

だけど」

紗織の髪は風に吹かれて、さらさらと揺れていた。彼女の髪は、動きやすいように短く切ってあるけど、光りを帯びるとキラキラと輝いて、すごく綺麗だった。

（男っぱいとは言っても、こうして見ると藤峰もやっぱ女の子だな……）

「何？私の顔じろじろ見て……」

「別にじろじろは見てないけど……」

その場に微妙な雰囲気 flowed たような気がしたが、紗織はそんな事はおかまいなしだった。

「俺に惚れんなよっ！」

「惚れねーよっ……！」

「冗談、冗談っ！」

紗織はそう言いながらククツと小鳥がさえずるように笑った。

「あーあ、藤峰も完璧サボリ組じゃん」

「樋口もでしょっ」

そう言いながら紗織は羽稀の背中をポンツと叩いた。

「あーあ、こんな2ショット藤峰ファンに目撃されたら、俺殺されるな……」

「何よ、それ」

彼女は羽稀のいった事が何故かおかしかったらしく、お腹を抱えて笑いはじめた。

「だって藤峰さー、陸上部の後輩とかいろいろファンいるだろ？藤峰ファンクラブだってあるらしいしさ」

羽稀が手短に理由を述べても彼女はそんなことはおかまいなしにずっと笑っていた。

「アハハハッ！！樋口ってば、おっかしーっ……！！」

（バシッ！）

「笑いすぎだからっ……！」

笑いが止まらなくなっただけに、羽稀は冷静にツツコミを入れてあ

げた。

「ごめん、ごめんっ…。フアンクラブねえ。でもさあ、どっちかっていうと私の方が死亡率高いと思うんだけど」

「は？なんで？」

「樋口知らないの？！あんたってば私なんかよりもよっぽど沢山、フアンが居るんだよ？」

「そんなのありえねーだろっ？！」

「まじで知らないんだあ…。クールで硬派な所がかっこいい！！…らしいよ？」

「や、『らしいよ』って言われても…。っーか俺ってクールかぁ？！」

「そこは否定すんなって！どっからどう見ても樋口はクールでしょ。あとねえ、バスケット部のエースで運動神経はいいし、頭もいいし、それでいて気取ったところがなくて素敵ー！！…だって」

藤峰はわざとらしく、芝居がかった口調で言った。

「『だって』って…。一体誰が言ってるんだか…」

（頭がいいってというのは、茗と図書館で勉強しまくってたお陰かなあ…）

羽稀はフアンクラブの事を知っても、驚きはしたが、嬉しくはなかった。

「告白だって何回かされてるんだろー？」

「まあ…、それなりに」

「…しかもみんな振ってるんだって？」

羽稀は少しギクツとした。

（そんな事まで知ってんのかよ…）

「ああ、全員振ったよ。藤峰には関係ない…」

紗織は急にスクツと立ち上がり、羽稀を真っ直ぐに見た。

「どうして？」

「……好きな人がいるから」

「…その好きな人ってここの高校？」

「違う…けど…」

「ふうん…」

紗織は意味在り気にそう相槌を打った。

「な…なんで？」

「べつつにいー」

すると、丁度いいタイミングで授業終わりのチャイムが鳴った。

「ほら、授業終わったよ。教室戻ろっ」

「あ…、ああ…」

（……？）

「おい！樋口！」

「あ？何？」

数人の男子が突然羽稀を囲むように現れた。

「お前さっきの授業、紗織ちゃんと一緒に居ただろ？！」

「へっ？」

おそらく…確実に藤峰ファンクラブの人達だ。

「『へっ？』じゃねーよ！！二人して仲良くサボりたあ、いい度胸じゃねーか樋口っ」

「誤解だつて…っ！！別に藤峰と何があつたわけでもないし、たまたま藤峰が俺のどこに来て…っ」

「問答無用！！」

「藤峰ファンクラブをなめるなよ…っ！」

「わー！ちよっ…・…たんま、たんま！」

藤峰ファンクラブ一同は羽稀の言葉は完全に無視して、指の関節をポキポキと鳴らしながら、じりじりと羽稀に迫っていった。

「ホントっ！勘違いだからっ！藤峰とは何でもねーってばっ！おい！シカトか？！」

「観念しろ！樋口っ！！」

ファンクラブ一同が羽稀に殴りかかろうとした時…

『ちよつとまった！！』

女子から「ちよつとまったコール」がかかった。
たぶん、おそらく、羽稀のフアンクラブ軍団だ。

「あんた達！羽稀様に手出したらただじゃおかないからね！！」

「…羽稀様…っておい、おい…」

「な…なんだよ。樋口が紗織ちゃん仲良くするから悪いんだろお…！」

「紗織も悪くないし羽稀様も悪くない！！悪いのはあんた達っ！」

さすがに女子の前では、藤峰フアンクラブの男子等もたじたじで逃げ腰だった。

「ちよつと、ちよつと！穏やかじゃないなあ」

『紗織ちゃんっ』

「私が樋口の所に行つたんだから、樋口には関係ないよっ」

フアンクラブの奴等に厳しくそう言つたあとに紗織は、羽稀の方を見てにっこり笑つた。

「なっ、樋口っ」

「う、うん…」

『はいっ！解散っ』

（女子のこの貫禄はすげえ…！）

羽稀はもちろんの事、男子の誰もがそう思つたであらう。

その日の放課後は部活があつて、男子バスケ部は、グラウンドを使つての外周だった。

「体育館部活たるもの、体力トレーニングを怠つてはいかん！」

バスケ部の部長は、いわゆる熱血タイプで、二週間に一回はこんな事をいいだして、みんなで陸上部に混じつて外周するのだった。

「樋口っ！」

「よお、藤峰」

「バスケ部も大変だなあ、体育館使えるんだろ？」

「ああ、でも熱血部長だから仕方ねえしな。いいよ、体力つくから」「ふーん。あ、やばっ。集合掛かつてる！」

「こつちも掛かってるし…っ。じゃあな」

「…バスケ部ファイト〜！」

羽稀が走ってみんなのところに行こうとした時に紗織は叫んだ。

それに対して羽稀は、振り返らずに、後ろに分かりやすいようにガッツポーズをした。

「あっちー…」

結局バスケ部は一時間半もの間、走りとおしてから解散になった。

「樋口。はい、タオル」

「藤峰か。サンキュー」

羽稀は紗織から清潔そうなタオルを受け取り零れ落ちる汗をふき取った。

「すごい汗だな〜。まあ、もうすぐ夏だし、当然か」

「藤峰は部活終わったのか？」

「ううん。まだ終わってないけど。もうすぐ終わると思う」

「んじゃ、こんなとこに居ちゃだめじゃんっ」

「いーよ。今休憩だし」

「あ、そ。何でもいいけど」

羽稀は汗を拭き終わると、タオルを首に掛けなおした。

「…あのさ」

「ん？」

「…樋口の好きな人ってだれ…」

『羽稀——！！』

紗織の声を遮るように羽稀の名を聞こえる声が突然聞こえた。羽稀はその声の持ち主を探そうとして、グラウンドに素早く目を走らせたが、それよりも早く、羽稀の背中に誰かが飛びついた。

「わっ！」

そのまま前のめりになって倒れそうになりながらもなんとか支えきり、羽稀は後ろを振り返った。三年前の笑顔が甦る。

「羽稀！！会いたかった！！」
「茗っ！！！！」

そこには、三年前よりも少し背と髪が伸びたけれど、笑顔だけは全く変わらない茗の姿があった。

第1話：クラスメイト（後書き）

『僕等』の方では登場人物が羽稀と茗の二人だけだったので、今回はもうちよつと出そうかなあと思い、とりあえずクラスメイトの紗織を出してみました。新しいキャラを受け入れてもらえるかが心配ですね（笑）まだまだ、出すつもりなのでお楽しみにっ♪登場人物がひととおりでたらまたプロフ書くつもりです。では次話もよろしく願いしますっ！

ふろむ すもも

第2話：おかえり

「羽稀！！会いたかったっ！！」

「茗っ！！！！」

ラブシーンを思いつきり目の前で見せ付けられたうえ、存在を忘れられかけていた紗織は、茗を羽稀から引き剥がし問い詰めた。

「何なのアンタ？！誰だよ！」

「おいっ、藤峰！！初対面の人にその態度は失礼じゃー」

茗は羽稀の言葉を遮った。

「そっちこそ誰？羽稀の友達？」

（呼び捨てにしている…。私は『樋口』って呼んでるのに…。！樋口も茗とかなんとか呼び捨てだったし…。っ。何なの、この子…。）

「私は藤峰 紗織。樋口のクラスメイトだよ」

「…女の子…だよね」

「どーいう意味だ」

「あ、気に障ったならごめんなさい。でも、言葉遣いが男の子っぽかったし、髪も短めだから男の子の可能性もあるかなあーなんて」（『気に障ったならごめんなさい』だって？！…これでも気にしてるのに…！）

「そりゃ悪かったなっ。あんたには関係ないだろ」

「それがそうでもないんだよね」

「どーいうこと…？」

「私は、水無月 茗^{めい}。明日から羽稀と同じクラスに転入してきますっ」

「…あんた転入生だったの？…ふーん同じクラスねえ」

「どーぞよろしくっ」

茗は小さくて白い華奢な手を、紗織に向かって出したが、紗織は茗の行動に答えなかった。

「悪いけど、部活中だからもう行くよ。じゃっ…」

紗織は茗を無視するように羽稀の方だけを見てそう言って、陸上部が集まっている所に走っていった。そして茗は紗織の行動に腹を立てたのか、その背中に向かって大声で叫んだ。

「言うの忘れてたけどー！私、羽稀の彼女だからー！そこんこよろしくー！！！！」

紗織の耳には茗の言葉がしっかりと届いていたが、紗織は振り向くことはしなかった。

「あーいう事大声で叫ぶなよ」

「だってえ…。良いじゃん、別にっ」

「良くはねーよっ」

「そんな事より、言う事ない？」

「…えつと…うん…おかえり」

羽稀は頬を赤らめて、恥ずかしそうにうつむきながら小さく言った。

「ただいまっ」

茗はそんな羽稀を見てにつこりと笑い掛けた。それにつられて羽稀も笑顔になる。

「ところで、なんで何の連絡も無しにこっちに来たわけ？おまけに同じ学校とか…」

「もちろん羽稀をドッキリ大作戦のためだよっ」

「…。」

「でね、本当はまだまだこっちに戻れない予定だったんだけど、無理して早くに来ちゃったんだ」

「え、じゃあ親とかいんの？」

「うん」

「一人暮らしって事？」

「まあ…そんなとこかなっ」

「…一人で平気なの？」

「一人じゃないじゃんっ。羽稀だっているもん、平気だよ」

茗はそう言って、もう一度軽く微笑んだ。

羽稀がずっと待ち望んでいた茗の笑顔は、今は羽稀の一番近くにある。三年前と変わらない笑顔は、何の前触れもなくあっさりと帰ってきてしまった。そんな事に羽稀は、妙な胸騒ぎを感じていた。

「さっ、もう行かなきゃ」

「どこに？」

「理事長？校長？分かんないけど」

「まだ行つてなかったんだ。普通は初めにそーいうところに行くんだけど」

「早く羽稀に会いたかったんだもんつ。真っ先に探したよ、羽稀のこと」

「…ま、それは俺も、だけど」

茗はいつになく素直な羽稀に上機嫌だった。もともと茗のトレードマークは太陽みたいな笑顔だったけど、今の茗はより一層にこにこ顔で、三年前よりもグンと綺麗になったように感じられた。

「じゃ、いくね」

「ああ。つと、ちょっと待って」

「んー？何？」

「俺もう部活終わったから、校門とこで待ってるから一緒に帰ろ」

「了解っ！」

そう言つて茗は手を振りながら、急ぎ足で駆けて行つた。そんな二人のやりとりを、紗織は遠くから見つめていた。

（樋口…）

二人は、まだ明るい道を並んで歩いていた。

「で、茗の家はどこにあんの？」

「家？家はねー…。葵町一丁目にあるよ」

「葵町一丁目？俺ン家と近いじゃん」

「んーまあ、近いつていうかぁ…。すぐ側つていうかぁ…」

「……お隣さんだったりする？」

「……お向かいさんだったりするんだよねえ」

そう言われて羽稀は、ほんの二日前ぐらいに向かいの家に、引越しセンターの車が止まっていた事を思い出した。

（あれ茗の引越しセンターかよっ！）

「…それも『ドッキリ大作戦』の一部？」

「『羽稀ドッキリ大作戦』だよっ」

「そこに食いつくなよっ」

「や、これは本当に事故でね、故意にやったわけじゃないんだよっ」

「俺はてつきり、また茗にストーカーまがいなことされたかと…」

「『また』って何よー！私そんな事してないー！」

「電話番号といい、住所といい…」

「だからーっ、あれは違うってばあー！…ちょっとはした、かもしれないけど…」

「ほらな」

「…ちっ違うよー！ちよこっつと羽稀の後を付いて行って、家を確認しただけだよっ」

「それ典型的なストーカーじゃんっ！」

（…何かこんな人と話すの久しぶりかもな…）

二人はそんな話を話しながら歩いて、もうすぐ家に着くところまで来たが、ふと、茗の家の前に少年とも少女ともとれる、子供が居る事に気が付いた。

「なあ、茗。あれ知り合い？」

「どれ？」

「茗の家の前に居るやつ」

「あれは…」

突然、その子供は茗と羽稀の方を見た。

「茗！……！」

そのまま子供は茗の方に向かって走り、茗に思いきり抱きついた。

（…っ？！何だコイツ！！誰だ？！）

「茗！！会いたかった！」

「なっ?！」

その場には蝉の声だけが耳障りなほど鳴り響いていた。

それでも羽稀の思考回路は全く機能していなかった。

第2話：おかえり（後書き）

どーもすももです♪

更新まで時間がかかりましたがやっと出来ました（笑

もう、全然話がまとまっていなくて、先が見えない状態なんで、もうちょっと話を組み立てられれば、UPも早くなるんだろうなあ…。

無理ですけど（笑

第3話：小さな少年

「茗！！会いたかった！」

「ナツ？！」

羽稀は茗に引つ付いているその少年を引っぱりはがした。

「…お前、誰？」

「離せようっ！！お前こそ誰だよっ！」

「ちよっと、羽稀！相手は子供なんだからあ…」

「子供じゃないやいつ！」

（語尾が子供くせえな…）

「羽稀、この子は小池 奈津なつっていつて、私が住んでた所のお隣家の子供でね、とても仲が良かったの。同じ学校だったし…」

「は？同じ学校？こいつ、どう見たって小学生…」

「失礼なやつだなあ！僕は中学2年生だよ！」

「中2？にしちゃ、やけにちっこいぞ。こいつ」

「うっさいなあ！こっちも気にしてんだよ！！」

「もう！二人ともやめてよねっ。向こうの学校は『小等部』『中等部』『高等部』のエスカレーター式の学校なの。」

「だから、こんなちっこいのも同じ学校なのか…」

「ちっこいゆーな！！！！」

（…こいつ本当に中2かよ……）

「いーかげん手離せよなっ！」

そう言つて、『自称中学二年生の少年、ナツ』は、羽稀の手を振り払った。

「ナツ、この人も年上なんだからその態度は失礼なんじゃない？」

「…わかったよ。」

（茗が言つとやけに素直だな…）

「おい！そのやつ！茗が言うから態度を改めてやるよっ」

「や、全然改まってないから！！」

ナツは羽稀の突っ込みに対して反応を示さずに、言葉を続けた。

「お前、名前なに？」

「…樋口、羽稀だけど。」

「ふーん。羽稀ね。」

「呼び捨てかよ…」

「僕の事はナツ様って呼んでいーぞ。」

ナツがそう偉そうに言っていると、羽稀はもう呆れかえっていたが、茗は若干怒りモードだった。

「ナツ!!」

「じよ、冗談だよー!茗…」

（全く、このマセガキが…）

「羽稀に謝ってよねっ。」

茗がそう言っていると、ナツは素直に羽稀の方を向きなおしてペコリと頭を下げた。

「羽稀お兄ちゃん、ごめんなさい。」（お兄ちゃんを強調して）

顔を上げたナツは、明らかに本気で謝罪しているような感情は読み取れない悪戯っぽい笑顔だった。

思いつきり笑うと、八重歯がにゅっと出て余計に悪戯っぽくみえた。
（反省してねえな…。ま、いつか）

「とりあえず家の中に入ろっ。立ちっぱなしじゃ疲れちゃうよ。」

「そうだな。あと引越しの手伝いとかもするし。」

「ホント? 助かるよー。大きな家具は一人じゃ動かせなくてね、困ってたの。」

茗はそう言っていると、家の鍵を靴からとりだして鍵を開けて家に招き入れてくれた。

「で、ナツは何しに来たの？」

茗がお茶とお菓子を用意しながらそう聞くと、ソファーに座ってキョロキョロと家を見ていたナツは、怒ったようにソファーを立った。
「何しに来たの?…じゃないよっつ。僕は茗を迎えに来たんだから!!」

『迎えに来た？？』

茗と羽稀が口をそろえてそう言うと、ナツはますます怒ったようで、茗の袖を引っ張った。

「だから僕は引越しの手伝いなんかしないからねっ！！」

ナツはそれだけ言っていると、プイツとそっぽを向いてしまった。

「何でこのちっこいのが茗を迎えに来るんだよ。」

「ちっこいゆーなあ！！！！」

ナツは八重歯をちらつかせながら、怒って羽稀に殴りかかりながら（羽稀は片手でナツの頭を押さえつけた）そう言った。

「どうして帰らなくちゃいけないのっ？私さつきココに着いたばかりじゃないっ！！」

「ごめんね、茗。茗には可哀想だけど、仕方ない事なんだ…。」

「何でだよ。」

「…理事長先生の命令なんだ。」

「理事長先生の？？」

「何でまた理事長がそんな命令すんだよ。っーかお前もその命令に乗んなよ。」

「うっさいなあ、羽稀お兄ちゃんに言われる筋合いはないよ。茗は分かっていると思うけど理事長先生の命令には逆らえないんだ。」

羽稀はナツの言ってる事にムツとしながらも、ナツの言ってる事を確かめるように茗を見た。それに対して茗は、渋々コクンと頷いた。
「理事長先生は何て命令したのよ。」

「『成績優秀で秀才コースに入ってる、その上秀才コースでもトップの、水無月 茗』の存在を失うのは惜しい。是非、我が“皇雅学園”での特別コースに進んでいき、我が校の誇りとして卒業して欲しい。そして卒業後も“皇雅学園大学”に特待生として入学、学者もしくは“皇雅学園大学”の教師としての活動を願っている。』
と、理事長先生から手紙を預かったんだよ。」

ナツは茗に、達筆で細かい沢山の字が並ぶ、紙を手渡した。
（茗ってそんなに優秀だったのか…。ちよっとビックリ…）

しかしそれをもう一度読み返すと、茗はバシツと言いつつ放った。

「却下!!」

『は?』

手紙をナツに突っ返すと、何事もなかったかのようにまたお茶とお菓子の用意を始めた。

「何で却下なのさ!」

「…ナツはお茶じゃないよね?もう帰るんだから。」

「ちよつと…茗っ!無視しないでよつ。それに茗と一緒に帰るつて言うまで僕は帰らないつもりだよ!」

「そんな事いったらナツ、一生帰れないじゃん。私は絶対に皇雅学園には戻らないんだからつ。」

「僕だって!茗は絶対に皇雅学園に連れて帰る!!」

(二人とも強情だなあ…)

「…ってか、何でお前が茗を連れに来たわけ?」

「羽稀お兄ちゃんには関係ない…っ」

ナツの言葉を遮るように、羽稀は突然ソファから立ち上がり身長でナツを威圧した。

「俺に関係ない?」

するとナツは驚くほど素直になった。

「…関係無くないデス。」

「で、何でお前が来たんだよ。」

「茗も優秀だったけど、僕だって優秀なんだぞ。ついでに言つと、僕の方が優秀なんだぞ。」

羽稀はそう言つて傲慢するナツに疑うような目を向けた。

「ほ、ホントだぞっ!!茗に聞けば分かるつてば!」

羽稀がそう言われて茗を見ると、茗は力強く頷いていた。

(まじかよ…)

「茗より優秀つて言つても『中2で』だろ?」

「違つよ!失礼だなあ。僕はもう大学のカリキュラムを受けてるんだからなつ。」

「…まじ？」

「もち。」

「とにかく！！ナツはもう帰って！私はナツとか帰らない。」

「こ、こんな時間じゃ帰れないよ！」

ナツがそう言っただけで初めて気づいたが、外はすっかり暗くなっていた。

「…それはそう、だけど…」

「決めたっ！！茗が『戻る』って言うてくれるまで、僕もここに住む！！！！！」

そして暫しの沈黙の後、羽稀と茗の大きな驚きの叫び声とその場に鳴り響いた。

第3話：小さな少年（後書き）

いきなりですが！登場人物のプロフコーナーです♪

樋口 羽稀（17） *ひぐち うき*

身長：175cm 体重：58kg

血液型：A型

星座：双子座（6/11生）

部活：バスケット部

水無月 茗（16） *みなづき めい*

身長：158cm 体重：45cm

血液型：O型

星座：うお座（2/21生）

部活：????

藤峰 紗織（17） *ふじみね さおり*

身長：164cm 体重：49kg

血液型：AB型

星座：しし座（8/19生）

部活：陸上部

小池 那津（14） *こいけ なつ* 通称：ナツ

身長：143cm 体重：33kg

血液型：B型

星座 : おとめ座 (8 / 24 生)

部活 : ? ? ?

えー、茗と那津の部活が不明ですが、後々掲載するつもりです。

第4話：ナツと羽稀

「僕も学校に行く!!」

「ナツ！ダメって言うてるでしょ？いくら頭がよくてもナツは中2なんだからね」

「いいじゃんかあ!!だって家で待ってるのなんてつまないよっ！」

「あのねえ…！ナツも遊びに来たわけじゃないんだから…」

「外に丸聞こえなんだけど」

どこから入って来たのか、羽稀は朝っぱらから大声を張り上げて二人に向かつて（トーストを食べながら）冷たく言い放った。

「ああ！おはよう羽稀！ちよつと聞いてヨー！」

茗は羽稀に助けを求めるようにそう言った。

「聞かなくても分かっているってば。ナツが『学校に行きたい』っておこちゃまな発言してんだろ。大学のカリキュラム受けてたってそういうところがまだまだ子供…」

ナツは羽稀の言葉を遮らせるように、茗に分らないように羽稀の足を踏んだ。

「いつ……！」

（つてえ…!）

「『おこちゃまな発言』で悪かったなっ！人の家に勝手に入るなっ、不法侵入って言うんだぞ、知ってるか？」

「お前が言うな!!チビすけだって茗の家の居候なんだから、少しは迷惑考えろよな。」

「チビすけじゃねーっ」

ナツは、羽稀が言ってる事が正しいので、言い返すことができず言葉をつくつと飲み込んだ。

「そうよ、ナツ。羽稀の言ってる事は正しいんだからね。昨日は夜も遅かったから泊めてあげたけど、今日はもう帰ってよね」

「そんなっ！！僕に理事長先生の所に一人で帰っていつもの？ひどいよ、あんまりだよ茗！！」

ナツは大声をだして、潤んだ目を上目遣いに茗に向けた。

「うっ…」

茗もそんな目を向けられて少し動揺していたようだったが、さすがに羽稀は騙せなかった。

「茗、早く行かないと遅刻する。ナツ！俺達が学校から帰ってくるまでに最善の方法考えときな」

「僕が茗を連れて皇雅に帰るのが最善だ」

ナツは必死で羽稀にくいさがる。

「茗の意思も考えての事か？」

「それは…。でも、茗は皇雅に帰るのが一番いいんだよ。今は分からなくても後々気づくさ」

「あつそ。とにかく理事長先生だかに連絡してみろよ。何か変わるかもしれないだろ」

「言われなくてもそうするつもりだ」

二人の間には、いつのまにやら火花が散っていた。と、それに見かねて茗が二人の間に割ってはいる。

「あゝもう！とにかく！！学校遅刻しちゃうから、後は学校が終わってから話そ？」

『…了解』

茗は二人に一括いれると、忙しそうにバタバタと仕度を始めた。

そんな茗を見ながら二人は小声で話し始める。

「結局俺達も茗には頭が上がらないって事か」

軽く溜息をつきながら羽稀が言う。

「茗を怒らせると怖い」

羽稀はナツを間近で見、その時初めて気づいた。

「…昨日は暗くて気づかなかったけど、お前もしかしてハーフ？」

「気づくの遅せーなあ。もう気づいてるのかと思ってたのに」

「じゃあハーフなんだ」

「残念だけどちょっと違うね」

ナツは、瞳が見えづらくさせていた長い前髪を掻きあげた。

ナツの色白の肌と金色がかった髪にとても似合う薄青い瞳が羽稀を覗いていた。

「僕はハーフじゃなくてクォーターだよ」

ナツはそう言うとその瞳をまた前髪で覆った。

「クォーターって事はお前の祖父か祖母が外国人ってことか」

「うん。僕の母方のおじいちゃんが外国人なんだ。もう死んじゃったけど」

「そりゃ…お気の毒様で」

羽稀は少し申し訳無さそうに言葉を濁した。

「母さんの名前はシャルル・メルフィーノ」

「シャルル…ってあの大女優の？」

「うん、母さんは大女優だったらしいね。僕はテレビに映ってる母さんを見たことはなかったけど」

「ふーん……」

茗は二人構う事なく、忙しなく動いていた。

「母さんは日本に仕事で来た時に父さんに出会い、二人は恋をした。でも父さんは突然母さんの目の前から消え去った。実はその時母さんは既に妊娠していた。僕だ」

「……」

ナツがただ一点を見つめ淡々と話しているのを、羽稀は時々頷きながら黙って聞いた。

「父さんも結構有名な人だったらしくて、たぶん子供が出来て母さんとスキヤンダルになるのが怖かったのさ。今では行方の分からぬ人だ。母さんは女優は引退して、僕を女で一つで育て上げた。でもその時に力になってくれていたのはやっぱりおじいちゃんだった。母さんはおじいちゃんの助けも得て、僕が小学生になるまで育ててくれた。でも、母さんは突然病で倒れた。僕の目の前でいっぱい血を吐いて床に倒れこんだんだ。もともと体が弱かった母さんの体は

もう、ボロボロだった。母さんは血の気の引いた顔で僕に一言囁いてから死んじゃった」

羽稀は聞いていいものかと少し戸惑ってから、優しく問い掛けた。

「…何て？」

「I Love You」

羽稀は、一瞬だけナツの瞳からキラリと光るものを見た気がした。

「母さんが死んでからはおじいちゃんが僕を引き取った。そして『小池』の姓をくれた。

でも僕が中学にあがると直前におじいちゃんも死んじゃってね。遺書には僕が皇雅学園の入学が決定した事が書いてあって、あとは今の通りさ」

「…お前苦勞人なんだな」

「まあね」

「あー！もう遅刻しちゃうよー！」

茗が仕度を終えて羽稀達の所に落ち着いた時は、もう既に遅刻ギリギリの時間だった。

「茗！走っていくぞっ」

「やだ、ちよつと待ってよ羽稀！！置いてかないでえ！」

「茗！羽稀！いつてらっしゃい」

ナツは羽稀の名前を呼ぶ時に少しだけ口ごもった。

『いつてきます』

二人は笑顔で返した。

第4話：ナツと羽稀（後書き）

随分更新が遅くなってしまい、大変申し訳なく思っております。はい。

一ヶ月近くも野放しにしてしまいました（-_-;）

実は期末テストなんてものがありまして、馬鹿な私ですから、勉強しなきゃなあ…との事で勉強一本に絞っていましたが！ついにテストが終わったので、これから今までのブランクを取り戻すつもりでバンバン書いてきますんで、よろしく！！（笑

第5話：生徒会長

「あのガキ、ずっと置いておくつもり？」

茗と羽稀は、学校への道を並んで歩いている。

「そういうわけじゃないけど…、放っておけないじゃない」

「って言ってもなあ…。理事長つてさあ、そんなに怖い人？」

「怖い…っていうかあ、逆らえないって感じ。秀才コースに入る上でいろんな援助も受けてるしねー…」

「ふーん…」

二人が歩いている道沿いに植えられた桜の花は、風に吹かれて激しく舞っていた。

「もー、春も終わりかあ」

「そうだな」

茗は手の平を桜の木の下に伸ばした。

「桜も咲き終わりね」

「そうだな」

茗の伸ばした手の平に桜の花びらがヒラヒラと舞い降りた。

「桜の花って私みたい…」

「何で？」

茗は暫し考えてから、朗らかに笑った。

「桜の花ってピンクで可愛いでしょ？私にソックリっ」

「アホか」

そう言っただけで羽稀は茗の頬を軽く摘まんだ。

「いたあいつ。もうっ、ほんの冗談だったのにい」

茗はそう言いながら頬を擦った。

「あ、桜どっかに飛ばされちゃった…」

気づくと桜は手の平から消えていた。

「やあ、樋口。おはよ」

「藤峰か、おツス」

「今朝は水無月と仲良く登校か？」

「見てたの？」

「見えたのっ。教室の窓から丸見えだったんだ」

「…あっそう」

羽稀が素っ気無く返事をする、紗織は羽稀の隣の自分の席についてた。

「教室に入ってくるのは一緒じゃないんだ？」

「職員室に行くのが先なんだってさ」

「じゃ、先生と一緒にHRの時に来るのか」

そんな事を言っていると…グットタイミング！！

先生が教室のドアを勢いよく開けて入ってきた。

「おい、ホームルーム始めるぞー！席につけー！！」

（水無月の席はどこになるんだろ…）

「さ、今日は転入生がこのクラスに入ってくる」

（ザワツ）

「まじで！！先生、先生！！女の子？野郎？どっちツスカ？」

「可愛い女の子カモーン！！」

「野郎はノーセンキューだぜい！！」

「転入生だって！！かっこいい男の子がいいよねーっ」

「どっちにしても羽稀様と紗織には敵わないって！！」

「言えてるーっ！」

『静かにしなさい！！じゃ、水無月さん。入って』

茗が教室のドアを開けると、男子も女子もシーンとなった。

静寂の中を茗はみんなの前まで余裕で歩いて行った。

「自己紹介して」

「皇雅学園から来た、水無月 茗といいますっ。仲良くしてネ！」

そう言って茗はにつこり笑った。

『か、可愛いー！！』

羽稀と紗織以外、クラスの全員の声がハモった。

「あの子すっげ、可愛くねえ?!」

「紗織ちゃんとはまた違った良さがあるよな!」

「バカ! 藤峰なんて目じゃねえよ!!」

「いやーん、すごい可愛い女の子!!」

「男の子じゃないのはちよつと残念だけど、あんな可愛い子だったら全然OKじゃない?」

（みんなすごい反応…。水無月そんなにいいかあ…?）

紗織はより、冷やかな視線を茗に送った。

（…やっぱ、みんなから見ても茗って可愛いんだ。…ちよつと優越感）

紗織は改めて惚れ直している(?) 羽稀を横目でチラリと見ると、思いつき足を踏んづけてやった。

「い…っ…!!」

（フンツ）

「何すんだよ、藤峰…っ!」

「何が?」

「…何でもないデス」

羽稀は、紗織の目力に負けた。

「つと、水無月の席は…。そうだな、樋口の後ろの席が開いてるな」
茗はそう言われると、周りの視線を大量に浴びながら嬉しそうに羽稀の後ろの席にストンと座った。

「よろしくネ、羽稀っ。それと、藤峰さんも」

紗織はチラッとだけ茗を見ると「どーも」とだけ言っただけ前を向いた。

「藤峰さんったらスネちゃってえ。可愛いー」

「…スネてなんかないっ!!」

紗織が茗に牙向けても、茗はニコニコするばかりであつた。

「今日のホームルームは終わりっ!! あと、一時間目は国語だが自習になるからな」

先生が教室のドアを閉めた途端、咳を切ったようにみんなは騒ぎ始

めた。

「水無月さあん！！皇雅学園から来たんだよね？あそこってすごく頭いい人しか入学出来ないんでしょ？」

「うん、そうらしいね。理事長先生はそう言ってたけど」

「えーすつごおい！と、いうかそんなにすごい学園からどうして白翼ばね高校みたいな凡人高校にきたの？？」

「凡人学校だなんて事ないと思うけど。んーと、理由はと聞かれれば『約束』したからかなあ」

『約束？』

クラスの女子は口を揃えた。

そんな女子達を前に、茗はフツツと微笑んだ。

「水無月さん」

女子達の和気あいあいとした会話の中にいる茗に、一人の少年が控えめに話し掛けた。

「はいっ、何用ですか？」

「生徒会長の楓かへでしゅうすけ 宗介です。先生に学校案内をするよう頼まれているのですが、いつが都合いいですか？」

生徒会長と名乗るその少年は眼鏡のよく似合う、中々カッコいい感じに見てとれた。

「学校案内？うーん…放課後でいいかなあ？」

「わかりました」

そう言う生徒会長はその場から逃げるようにそそくさと男子達の輪に戻っていった。

「茗ちゃん。楓くんってああ見えて結構モテるんだよー」

「まあ、それなりにカッコいいかなとは思ってたけど。真面目くんじやない？」

「ああ、そう言われると真面目っぽいけど、運動できるし頭もいいしちよつと抜けてて可愛いところあるしねえ」

「へえ…。…学年で一番モテるのは誰？？」

茗は一つの答えが返って来るであろう事を予想した。

「学年一と言ったら絶対羽稀様！！茗ちゃんの前の席の彼ね。ちょっと難い感じはあるけどクールでいいのよおっ！！」

茗はその言葉を聞いて、押さえきれず笑みが零れた。

「そうッ」

「なあに？茗ちゃんってば嬉しそうじゃあん」

「何でもないヨ」

そう言った茗の顔は、明らかにニコニコしていた。

「あ、そだ。私、田中^{たなか}美沙梨^{みさり}って言うの！！美沙梨って呼んでね」

「うんっ、私の事も茗でいいよ。よろしくっ！」

美沙梨は少し長めの髪を軽く掻き揚げて、笑顔でそう言った。

茗もそれに必殺スマイルで返した。

「ホンッと、茗って可愛いねえッ妹に欲しいわぁ」

「やだ、美沙梨の方が可愛いよぉ。彼氏とかもちろんいるんでしょ？」

「それがこないだ別れちゃってフリーなの」

美沙梨は冗談っぽくそう言って肩をすくめた。

『よろしくー！』

二人は手を軽くパンツと合わせた。

第6話：学校案内 by 生徒会長

「ここが音楽室で、この廊下を真っ直ぐいった所が美術室です」

生徒会長はよく通る声で茗にわかり易いように学校案内をしていた。

「へえー、広い学校だね。場所とか覚えるのに時間かかりそう」

「田中さんとかと一緒に移動すればそのうち覚えると思いますけど」

「美沙梨？そうね、でも羽稀とか藤峰さんと一緒に行動するかも」

茗はそう言って嬉しそうに笑った。

「・・・樋口くんや藤峰さんとは知り合いなんですか？」

「んー、藤峰さんは知り合いって程じゃないんだけど、ね。羽稀とは仲良いんだよ」

生徒会長は「そうなんですか」と小さく呟くと、また学校案内を始めた。

「最後に、ここが第二体育館です」

「体育館が2個あるのね」

「はい。第一体育館では『演劇部』や『ダンス部』などの部活が主に使っていて、第二体育館では『バレー部』や『バスケット部』が主に使ってるんです」

茗は第二体育館を見上げるようにじっとみた。

第二体育館は最初に見た第一体育館よりも遥かに綺麗だった。

第二というだけあって、あとから作られたと考えれば当然といえば当然なのだが。

目を閉じて耳を澄ますと、微かにバレーともバスケットともわからぬ、ボールを突く音が聞こえた。

「今バスケットもここで部活中？」

「え、はい。まあ。バスケット部に興味があるんですか？」

「ううん。ちょっと聞いてみただけ。ところで生徒会長は部活、何やってるの？」

茗は表情をパアツと明るくして、生徒会長にたずねた。

「僕ですか？・・・演劇部ですよ」

「へえ、ちよつと意外だなー」

「やっぱりそう思いますか？言われるとは思いましたけど」

「運動部かな、とも思っただけだね、演劇部だとは思わなかったから」

茗はにこにこ笑っていたが、生徒会長はどこか緊張気味で硬い笑いをこぼしていた。

「水無月さんは部活どこにはいるんですか？・・・演劇部に入って貰えると嬉しいんですが」

「演劇部も面白そうだよねえ」

「だったらこれから演劇部に行ってみませんか？僕、案内しますけど。見学だけでもいいですよ」

生徒会長は結構乗り気で、茗を第一体育館に連れて行く気マンマンだったが、茗は少し困ったような顔をしていた。

「ごめんなさい、今日じゃなくて時間がある時でいい？」

「構いませんけど、今日は何か用事あるんですか？」

「ん、今日はバスケット部を見に行こうと思ってたの」

「え、どうしてですか？」

生徒会長は驚いたように少し目を見開いた。

「なんとなくだよ」

茗はわざとらしくそう言うと、第二体育館に小走りで向かった。

「案内ありがと、もう行くね。バイバイ！！」

生徒会長は陽気に手を振り駆けて行く茗に、思わず手を振り返してしまっていた。

第二体育館の扉を開けると、微かにしか聞こえなかった音達がよく響いて聞こえた。

茗は中に入り扉を閉めて階段を上り、ギャラリーへと行った。

上から見下ろすようにバスケット部の練習を見ると、羽稀の姿が嫌でも目に入った。

羽稀は三年生の中でも一際大きな声を張り上げていて、シュート率もほぼ百発百中で、やっぱり一番かつこよかったからだ。

しばらく羽稀の姿を目で追うように見ていると、その視線に気づいたのか羽稀は茗のいるギャラリーに汗だくで上がってきた。

「・・・お前こんなところで何してんの？」

羽稀は暑そうに服をパタパタさせながら小さくたずねた。

「えっへへー。見学だよ」

「だから・・・何で見学に来てんのか聞いてるんだけど」

「私がバスケット部の見学に来ちゃいけない？ねえ、私このマネージャーやりたいんだけどさー・・・」

「それ、ムリ」

羽稀は茗の言葉を遮って、バシツと言いつつ放った。

「ちょ・・・っ、まだ言い終わってもいないのにー！何でムリなのっ？」

「それは・・・」

羽稀は口を開きかけたが、誰か明るい声に邪魔された。

「先パイっ！」

下からジャージ姿の女の子ーたぶん一年生ーが来て羽稀にタオルを渡した。

「はい、どうぞっ」

「・・・ども」

「樋口先パイ、部長が呼んでますよ。『すぐにミーティングルームに來い』だそうです」

「あー・・・じゃあ、茗。ごめんちょっと行ってくるから待ってて」
「はいはい」

茗が女の子をチラッとみると、女の子はそれに気づいて茗に向かつてニコツと笑った。

「・・・あなたここのマネージャー？」

「はいっ、バスケット部のマネージャーで一年の笹原やすみ、と言いますっ」

元気よくそう言うと、やすみはペコツと頭を下げた。

「えと、羽稀と同じクラスの水無月茗です」

「じゃあ、水無月先輩。部活中なので失礼します」

そう言うと、やすみはギャラリを急いで降りていった。

しばらく待っている、羽稀が小走りで戻ってきた。

「・・・意味わかった？」

「先客が居るってわけねっ！わかったわよ！マネージャーは一人しかなれないのねっ！」

「いや、そういうわけじゃないけど・・・」

羽稀は、予想以上に怒る茗を目の前に、口籠もりながら言った。

「じゃあ、なんで？」

「あいつ一人で今んとこ十分だし、茗が居ると逆に足手まといになりそう・・・」

（ドスッ！！）

「・・・うっ」

茗は羽稀の言葉を全部聞かないうちに、羽稀のみぞおちに一発パンチを入れてやった。

「あーそうですか！！お呼びで無いつてかつ！！羽稀の馬鹿っ、アホっ、おたんこなす！！」

茗が怒って体育館を出ていっても、羽稀はそれどころではない状態に陥っていた。

「みぞおち完璧入った・・・っ。まじ痛てえ・・・ー！！」

羽稀はその場に膝をついた。

「おい！！樋口っっ。いつまでサボってんだ！！バツとして、後で校庭10週だ！！10週！！」

相変わらずの熱血漢、バスケット部部長の声をうつすらと感じながら、羽稀は小さく呟いた。

「そりゃ、キツイっすよ・・・。ぶちよお・・・っー」

第7話：演劇部ぶちよ ↓

「私、演劇部に入ります！！」
『へ？』

茗は怒って羽稀を殴ってから体育館を出た後、茗は演劇部のいる第一体育館にやってきていた。

「頭きたー！！羽稀のバカアっ！！」

茗の叫び声はむろん体育館の中で響き渡り、おそらく第一体育館

―防音効果バツチリ―の外にも聞こえたと思われるぐらいだった。

・・・補足として、たぶん羽稀もただならぬ気配を感じとったと思う
うー

「・・・声量は合格点ね」

声のする方を見ると、そこには無表情のまま親指をぐつと立てている、黒髪の綺麗な女ひとが立っていた。

戸惑っている茗に構わず、彼女は言葉を足した。

「Welcome to 演劇部」

やっぱり無表情だ。

（この人言ってる事と、表情がかみ合っていないわ・・・）

「部長さん・・・ですか？」

「ええ。演劇部部长、いはら帷原 まなみ真名美です」

とことん無表情だ。 いや・・・ちょっとだけはいかんでる気がする。

「帷原部長ですね。 2年の水無月ですが、入部を希望したいんです」

「入部希望？へえ・・・」

そう言くと、真名美は茗を見極めるように見回して、呟いた。

「いいわ、入部を許可します」

「ほんとですか？ありがとうございますっ！」

真名美とは対照的に、笑顔を惜しげも無く振り撒く茗の肩に誰かがポンツと手を置いた。

「水無月さんっ！演劇部に入ってくれたんですか？」

「あ、生徒会長」

「嬉しいなあ、まさか水無月さんが演劇部に入ってくれるなんて・
っ」

（・・・半分はやけだけどね）

苦笑する茗。嬉しさいっぱいで笑顔の楓（生徒会長）。無表情の真名美。

この三人の光景を眺めている他の部員達は、クスクスと笑い声を漏らしていた。

「そうだわ、楓くん？」

「はい、何ですか？部長」

「水無月さんも最初はいろいろとわからない事もあるだろうから、楓くんに水無月さんの指導係をまかせるわ。いいわね？」

「はい！もちろんですっ」

そう言うのと真名美は、どこかへ行ってしまった。

「ねえ、生徒会長。帷原部長も舞台に立つのよね・・・？」

（無表情なのに演技とか出来るのかなあ・・・？）

「部長はシナリオを考えたり、監督専門で。舞台に立つ事はほとんどないですよ」

「へえ、そうなんだ」

（ちよつと安心したかも）

「演劇部の総員は6人、水無月さんを入れて7人。部長と僕と3年生の男子が2人、2年男子1人、1年女子。ちよつと人数は少ないですがよろしく願いますっ」

「うんっ！よろしくね」

二人はニコツと笑いあった。

「なあ、樋口。あのこ演劇部に入ってたって、知ってる？」

休憩時間に沙織が羽稀に話し掛けた。

「『あのこ』って茗の事？」

「それしかないだろ。で、知ってる？」

「初めて聞いたけど」

羽稀はバスケットボールを持て余しながら、軽く返事を返した。

「ま、知らなくて当然なんだけどね。だってさっき入ったばかりなんだ」

「じゃあ何で藤峰は知ってるんだっつーの・・・っ」

羽稀はそのまま綺麗なフォームでバスケットボールをリングへと吸い込ませた。

「ナイツシュっ！・・・でもさ、絶対にあのこバスケ部のマネージヤーになると思っただけどなあ」

（・・・鋭い。さっき来てたよ）

「・・・ふーん」

「興味なさそうだな」

「そういうわけじゃないけど・・・」

「でもさあ、演劇部に入るってたってこんな時期にそう簡単に入れなと思うんだけど」

「そうか？部活なんて入部届の申請さえすれば入れるだろ」

「知らないのか？樋口」

沙織は怪しげに笑いながら、そう言った。

「な、何をだよ」

そうな沙織に羽稀は妙な恐怖感を感じた。

「ここの高校の演劇部は特別枠なんだよ。申請するだけじゃ入れない。部長の許可が下りないと入れないのさ」

「なんじゃそりゃ、聞いたことねえぞ」

「どうせ居眠りしてて聞いてなかったんだろ」

（・・・悪かったな）

「毎年部長の面接は厳しかったんだけど今年の部長は今までで一番厳しいって噂」

『ピーツ休憩終わりーっ！』

「噂かよ・・・。ほら、もういいだろ。休憩時間終わりだしお前も

部活に戻れよ」

「私は今日の部活はもう終わりだもん。樋口もあと少しで終わるだろ？待ってるから一緒に帰ろ」

「何で俺が藤峰と帰らなきゃいけないだよ」

「まだ、話があるんだ。水無月の事心配してんのか？」

「アホ。そんなんじゃないよ」

そう言いつつも少し考え込む羽稀。

（・・・でも茗は怒って出てっちゃったし今日は一緒に帰らなくていいかな。みぞおちを殴られた仕返しっつーことで・・・）

「な、いいだろ？」

「・・・ああ。わかった」

羽稀がそう言うと、沙織は上機嫌で体育館を出て行った。

（ふう・・・）

「おーいっ！！樋口っつ。とつくに休憩時間は終わってるぞー！」

「え・・・っ?！」

「バツとして後で校庭10周だ！10周！！さっきのも合わせて20周だぞーっ！」

「うっつ。・・・そんなぁーっ・・・」

（前回と同じ終わり方がよ・・・っ）

第8話：空しい少年

「あれ樋口、部活終わったんじゃないの？何で外周してんの」

「お前のせいじゃ、どアホっ！」

羽稀は息を切らしながら、後ろから走ってついて来る紗織をどついた。

「いたっあ。何、私のせいなの？」

「半分、な」

「・・・あと何週走るの？」

「5周走ったからあと15周だけど」

「そ。じゃあ、半分が私のせいなら10周だけ一緒に走ってやるよ」
紗織は羽稀の右隣につくと、出来るだけ羽稀のペースに合わせて走ってくれた。

「・・・俺、もっとペースあげようか？陸上部のお前からすると、このペースじゃ遅いだろ」

「そうでもないよ。私は短距離と高跳び専門だから持久力はあるまじり自信ないんだ」

（それに・・・出来るだけ一緒に居たいし・・・ね）

いつもは憎まれ口の一つでも言い合える仲なのに、改めて二人つきりになると、二人とも言葉を交わさなくなってしまった。

「・・・そういやあ、俺に用事あるつつてたよな、藤峰。何だよ」
無言で走るのに堪えられなくなった羽稀は、さも今思い出したかのようにそう言った。

「ああ、そうだった。ホラ、来週テストがあるだろ？でも、今回全然勉強わかんなくてさ。勉強教えて貰おうかと思ったんだけど、ダメかな・・・？」

紗織は、頼み込むように手をパンツと合わせた。

「・・・ふーん、藤峰って成績は悪くねえけど、頭は悪いいのな・・・」

(ゴン・・・ッ！)

ふざけてそう言う羽稀の後頭部を叩いて、沙織は素晴らしい音を出した。

「いて・・・っ！」

「だからこうやって頼んでるんだろ、余計なお世話だよ。樋口は頭いいからいいよな！」

沙織は不機嫌そうに顔を歪めて毒づいた。

「・・・頼んでる態度とは思えないけど―」

「何か、言った・・・？」

「なんでも無いッス」

とか何とかやってるうちに、いつの間にか早足になっていたせいだろう。

あつという間に10周は走り終わった。

「はあ・・・っ！疲れた・・・」。樋口はあと5周残ってるんだっけ？」

「ふう・・・、まあな・・・一緒に帰るんだっけ？すぐ走ってくるからちよつと待ってる」

羽稀はまだ息も落ち着かない状態ですぐまた走り出そうとしたが、沙織に腕をつかまれ、引つ張り戻された。

「も、いいんじゃない？十分走っただろ。もうすぐ暗くなっちゃうし帰ろうよ」

「ば・・・っ、何言って・・・」

「誰も見てないんだし、いいじゃんっ。さ、帰ろー！」

そのまま納得いかない様子の羽稀を、沙織は無理やり引きずってスタスタと歩いていった。

(だ、だったら最初から走らなくてもよかったじゃん・・・！)

何だか無償に虚しさを感じる少年が、ここに一人。

「でさあ、勉強。教えてくれるの？教えてくれないの？」
腕を組みながらなんともでかい態度の沙織。

「だ、っから。その偉そうな態度は何なんだ・・・?!」

「・・・別に、嫌なら嫌って言うてくれれば・・・」

沙織はでかい態度から一変して、急に申し訳なさそうにうつむいた。

「な・・・っ、べ、別に嫌じゃねーよ・・・」

「・・・本当に？」

「ああ、・・・俺は嘘は言わねえ」

羽稀は沙織の表情を伺うように、静かに言い放った。

すると、たちまち沙織の表情はパアツと明るくなった。

「樋口、ホントだなっ？約束だぞ」

「お、まえ、・・・俺を騙したなっ」

「何とでもいいなっ、勉強教えてくれるんだよな？嘘は言わないんだよな？」

悪戯っぽく笑いながらそう言う沙織に、羽稀はグツと言葉を飲み込んだ。

（してやられた・・・っ！）

何だかとてもなく空しく感じる少年が、ここに一人。

第9話：RPGのバトル

「ちょっとお…！何で羽稀ってば私を置いて藤峰さんと帰ってるのよっ」

怒り口調の茗の声を聞いて、羽稀の肩がピクンと反応する。

恐る恐る羽稀が振り返ると、やはり茗は眉を釣り上げて睨みをきかせていた。

動けもしない様子の羽稀と、嫌悪の表情を浮かべている紗織に、茗は素早く駆け寄った。

「羽稀、聞ってるの？」

羽稀は、どこからどう説明すれば良いのか全くわからず、結局助けを求めるようにウサギのような目で紗織を見る事しか出来なかった。紗織は羽稀のそんな視線に気づいて、眉をしかめながら茗に毒づいた。

「別に、樋口が誰といつ帰ろうが勝手だろ」

あまりの態度にすかさず茗も反撃をする。

―― 紗織VS茗 ―

ファイトッ！

「勝手じゃないもんっ、言ったでしょ？私は羽稀の彼女だって」

茗の攻撃は紗織にヒット！ダメージ30。

いつもは穏やかな茗も、紗織の態度を前にして、いつになく強気だ。

…火花が散りに散っている事は言うまでもない。

二人ともものすごい速さでつかつかと並んで歩いている。

羽稀はというと小走りで、二人に追いつくのがやっとといった感じだ。

「そんな事聞いた覚えはない」

紗織の必殺技“すつとぼけ”が茗にヒット！ダメージ50。

「ずるいつ、すつとぼけないでよっ」

茗の攻撃を紗織はヒラリとかわした。

「何でも良いけど、随分束縛心の強い彼女だな」

追い討ちをかけるように紗織の攻撃がヒット！ダメージ20。

「な…っ、言ったわねえっ。ちよつと羽稀も黙ってないで何とか言いなさいよ！」

「そうだよ、樋口！！何とか言えよっ！！」

矛先は完全に羽稀にロツクオン！！羽稀にダメージ200。

二人は突然足を止め、今まで後ろをついてくるだけだった羽稀に詰め寄った。

ハムスターのようにオロオロするばかりの羽稀が、あまりにも可哀想だ。

「あ…っ、の…ー」

『男ならハツキリしろ！！』

クリティカルヒット！羽稀に大ダメージ。

羽稀はもうろうとした意識の中でこう思った。

（誰力助ケテクダサイ。上手ク呼吸がデキナイノデス）

「近所迷惑だよ」

羽稀の声を、神様はちゃんと聞き逃さなかったようだ。

その声の持ち主は苛立ち気に微かに眉をひそめて、そこに立っていた。

（ナツだ…。神様ありがとっ！！…ああ、ナツが天使に見える…）

羽稀に仲間が増えた。チャラララッチャラッ♪

「何でナツってばここにいるの？」

茗は今まで怒っていた事を忘れ、以外な人物が現れた事にすっかり興味が移っていた。

「僕がここに居るのならば、それは多分ここが茗の家の前だからでしょう」

茗は、ナツにそう言われて初めて気がついた。

「……ここ私の家じゃん!!」

ナツはイライラした様子で、腕を組みながら足を小刻みに踏み鳴らして、茗の家の塀に寄りかかっていた。

「どうしてそれを僕に言われなきゃ気がつかなかったのか、ミステリーだね」

長時間留守番を喰らったからだろう、ナツは朝よりももっと子憎たらしかった。

「……ところでさあ、そっちのお姉さんは何？茗の新しい友達？」

ナツは紗織をじっと見つめた。

紗織も稀に見る美少年に目を見張っている。

「紗織よ、藤峰紗織よろしく。君は水無月の……弟？」

「残念だけど違うよ。強いて言うなら僕は茗のクラスメイトかな。ナツって言うんだ」

ナツは、決して羽稀には見せないような素晴らしい（余所行きの）笑顔で紗織に言った。

「とにかくさ、別に僕は『近所の人にジロジロ見られて嬉しいが』ような趣味は無いんだから、家の中で話すべきだと思う訳だよな」
「可愛い笑顔とこの毒舌の激しいミスマツチがどうにも絡みにくい。」

紗織のナツに対する第一印象は、『可愛い子だけど、生意気だな』だ。

たぶん、おそろく。

ほとんどの人がそう思うんじゃないかと思うけど。

「それはさ、羽稀が悪いんじゃないの？騒いでた二人もどうかとは思っけどね……」

羽稀は茗の家に入ってからずっと、ナツにグチグチ言われていた。

「あたしは樋口に用事があつたから一緒に帰っただけだ」

沙織はいやに落ち着いた様子で、家の中を眺め回しながらそう言った。

「用事って何よお」

茗はまだ不機嫌そうな表情を浮かべている。

「別に、もうすぐテストだから勉強教えて、って言うただけ。樋口も良いって言うてくれたし」

「ウソ！羽稀良いって言ったの？」

茗はキツと羽稀を睨んだ。

羽稀は言葉を詰まらせ、ナツをチラリとみた。

ナツは「仕方ないなあ」とでも言いたそうに大きくため息をついた。
(まあ、タジタジになる理由もわかるけど…ね。情けないなあ)

「じゃあみんなで勉強すればいいんじゃないの」

ナツは男の情けとばかりに助け船を出す。

それを聞いて、羽稀は激しく頷いた。

「お、俺は別に良いけど…。二人はいいの？」

「いいわよね？藤峰さん」

「どうぞ、ご自由に」

二人とも、笑顔で火花を散らしている。

(笑ってれば二人共モテるけど、こうなると誰も敵わねえ…)

「明後日は土曜日だからその日がいんじゃない？」

「そうね、その日がいいな。羽稀もそれでいいよね？」

「…いいけど、どこでやるの？」

「羽稀の家でやってもいいんだけどねえ、私の家でやる方が親も居なくて気楽でいいわよね？」

「…それとは違う理由で、俺ん家じゃない方が嬉しいよ」

羽稀はそう言って笑ったが、かなり引きつっていた。

「茗、僕その日は用事があるから出掛けるね。帰ってくるのは夜になると思っから」

ナツは思い出したようにそれだけ言うと、二階に消えた。

「…そういえば、樋口の家ってこの近くなの？」

「近くって言うか、この家の向かいの家なんだけどね」

「ふーん」

沙織はそう言っ、窓から羽稀の家を見た。

「おい、藤峰。俺も、もう家に帰るからお前も帰れ」

「うつわ、偉そー。」

笑いながらそう言う沙織の頭を、羽稀は軽く叩いた。

「アホ。いくら夏だから日が落ちるのが遅いつて言っただけで、こんな時間に女が一人で出歩くのは危険だつてんだよ。俺が珍しく気を使っ、てやっ、てんだから、大人しく言う事聞けよ」

「ハイハイ、わかってるつてば」

沙織はすばやく立ち上がっ、て、玄関へと急いだ。

「じゃあね羽稀、藤峰さん」

茗の不機嫌はすっかり直っ、ていて、笑顔でそう言っ、た。

羽稀が（お向かいの）家に帰ると、見計らっ、たように電話が鳴っ、た。今日は部活で散々走らされた挙句女のバトルに巻き込まれ、ヘトヘトだっ、た羽稀は電話に文句を言いながら受話器をとっ、た。

誰だよ…くそっ

「…ーもしもし、樋口です」

「樋口か？俺だ」

嫌になる程聞き飽きた熱血部長の声が聞こえただけで、羽稀はドツと疲れるような感じがした。

「…ああ、部長ですか。どうかしたんです？」

しかしその気持ちを隠すように、羽稀はわざとらしく明るく返事をした。

「お前今日、ちゃんと走っ、ていたようだな」

「そうですよー、部長が言っ、た通り走りましたよ」

「ほほう、俺が『20週走れ』と言っ、た通り15週きっ、かり走っ、たようだな」

「はいつ、そうなんです…って、え…？な、何で知ってるんですか？！」

「フッフ、俺を侮ってはいかん…！まあ、15週は走ったようだから、明日走るのは10週でいいぞ、樋口」

部長の優しさが微妙すぎる…っ

「ま、また走るんですか…っ」

「誤魔化せると思うなよ樋口…！フッフ…ーガチャ、ツ…ツ…」

羽稀は受話器を握り締めたまま愕然とした。

（恐るべし熱血部長…っ、何で15週しか走って無い事知ってたんだ部長…！こわ…っ）

羽稀がしばらく筋肉痛でダウンしたことは言うまでもない。

第9話：RPGのバトル（後書き）

大分久しぶりの投稿になってしまいました←←私も高校受験でそりやあもう大変でしたヨ（・・・）しかし！それももう終わり！無事受かりましたあ！パチパチ・・・改めまして、李と書いてスモモと読む、こんにちわ♪これから出来るだけ早く、たくさん作品を書いていきたいと思っています。なにとぞよろしくお願いします
m（——m）ペコリ。すももでした

第10話：勉強会？

「だから、悪かったって言ってるじゃん」

沙織は謝っているとは思えないような軽さでそう言う。

羽稀は不機嫌そうに顔をムスツとさせている。

横目で沙織をチラと見やる。

「さっきも言ったけど、俺はまたお前のせいで昨日10周走ったわけ。もうめっちゃくちゃ疲れてたわけで」

そっぴいながら軽いため息をつく羽稀。

沙織を苦笑交じりにの表情に変わる。

「で、でもさ、勉強教えてくれるって言っただろ？」

「こんな朝早くからとは聞いてない」

「う・・・、ごめん」

さすがの沙織を無表情で淡々と冷たく言い放つ羽稀に、しゅんとなった。

「はぁ・・・、もういいよ。折角起きたんだし、ビシバシ教えてやるよ」

笑顔でそう言う羽稀だが、そのオーラはどことなくドス黒い。

―― 今から10分程前

ピンポン♪ピンポン♪・・・ピンポピンポピンポピンポ・・・ピポピポピポピポ・・・

「だー！うるさい！！」

「お、やっと起きたな」

俺は“朝っぱらから家のチャイムを鳴らしまくるような女”は、今まで見たこともない。

目の前にいる“朝っぱらから家のチャイムを鳴らしまくった女”は、

俺の不機嫌且つ迷惑そうな顔なんて全く見えてないようなすてきな笑顔だ。

「おはよう、樋口」

俺は目の前の妙にム力つく笑顔の女のデコを弾く。

なんでこんな朝っぱらから起きなきゃいけないんだ。俺は昨日藤峰が半ば無理矢理さばらせたせいで部活が終わった後一人残って10週走ったんだぞ？今日は土曜日だ。部活はない。お昼まで寝ててもいいくらいだ。大体コイツはなんだ？ええ？人を早くに起こしておいてこの笑顔はなんだ？…ドSか？！…いや、そんな事は俺がMじゃない限りどうでもいい。俺は人に弄られて喜ぶような変態じゃない。そっぴやうちのクラスにドMでホモとかいう噂の奴がいたなあ。男に蹴られて笑顔+嬉しそうな声色で「なんだよお」やめるよお」…というのを聞いた事がある。気持ちの悪い奴だ。…って、そうじゃないだろ！とにかく俺は眠い。寝たい。よし、寝よ。

俺は心の中でそう毒づいたつもりだったが、寝起きとは怖いものがある。

思いつき口に出していた。

「なんでこんな朝っぱらから起きなきゃいけないんだ。俺は昨日藤峰が半ば無理矢理さばらせたせいで部活が終わった後一人残って10週走ったんだぞ？今日は土曜日だ。部活はない。お昼まで寝ててもいいくらいだ。大体コイツはなんだ？ええ？人を早くに起こしておいてこの笑顔はなんだ？…ドSか？！…いや、そんな事は俺がMじゃない限りどうでもいい。俺は人に弄られて喜ぶような変態じゃない。そっぴやうちのクラスにドMでホモとかいう噂の奴がいたなあ。男に蹴られて笑顔+嬉しそうな声色で「なんだよお」やめるよお」…というのを聞いた事がある。気持ちの悪い奴だ。…って、そうじゃないだろ！とにかく俺は眠い。寝たい。よし、寝よ」

藤峰はポカンとしている。

「…樋口。声に出てるぞ」

「……え」

暫しお互いに無言。

あれ？俺何て言った？

藤峰はちよつと呆れ顔で俺をジツと見ている。

（樋口って寝起き最悪なんだ…。あ、寝癖。可愛い。）

「と、とにかく。俺は眠いんだよ。勘弁してくれよ」

「まあ、朝早くから来たのは悪かったよ。でも一昨日約束したろ？」

「お前なあ…。それが謝る態度かつ！」

ああ、俺って最近ついてないな。

まあ、そういうわけで、結局俺はその後、藤峰を連れて茗の家に行つて、勉強会をするはめになった。…眠い。

「で、何がわからないんだ？」

沙織がもつずっと問題集と教科書と睨めっこしているのに見かねて、羽稀が言った。

「…数学」

沙織はシャーペンの後ろを顎に当てながら羽稀をチラツとみやる「数学の、どこ？」

沙織は気まずそうな顔をした。

「どこがわからないのかわかんないくらいわからないって言うかー

…」

出た。

”わからない”の最上級だ。

「ほう　じゃあーからみっちり教えてやるよ」

満面の笑みを浮かべて言うと、藤峰は顔を引きつらせて苦笑した。

「お、お手柔らかに」

それから俺は藤峰に公式という公式を理解・覚えさせるために約2時間費やした。

「ーで、 $\sin \cdot \cos \cdot \tan$ の公式がそれぞれ こうなるわけ。わかった？」

藤峰は少し不安気に頷いた。

茗はそんな様子を可笑しそうに、遠巻きにクスクス笑っている。

「あー、喉かわいた！休憩にしようぜ」

「・・・そうね、頭パンクしそう」

紗織は夏の暑さではなく数学に完全にやられていた。

「ねえ、茗。喉乾いたんだけど・・・」

結局一切紗織の勉強を手伝わなかった茗は一人だけ涼やかな表情だった。

「水道水でいいならあるけど」

にこっと笑顔でそう言う茗。冗談か？天然か？

「・・・水道水はちよつと」

「仕方ないなあ、じゃあ買ってくるよ」

パタパタと2階にあがり、小さなポシェットを持ってくると、そこに財布だけをいれて、茗は近くのスーパーまで買出しに行った。

羽稀はふう、と息を吐いて窓の外を見つめた。

（あつ）

紗織は羽稀のこの表情をよく知っていた。

一人で居る時によくする表情で、紗織は羽稀のこの表情が切ない程好きだった。

そう、あれは私が初めて樋口羽稀を見た日だ。

第10話：勉強会？（後書き）

久しぶりに更新することができましたm(――m)
最近は学校学校バイトバイトで小説を書く余裕がありませんでしたが、そろそろ余裕が出てきて、話も練りに練れたのでこれからはやんじゃん更新していくつもりですので、よろしくお願いします。良いところも悪いところもメッセージいただけると嬉しいです^^
李でしたっ

第11話：横顔

私は部活がない日の放課後、6限の体育の時に忘れていってしまったタオルを取りに、体育館へと向かっていた。体育館に近づくと、バスケットボールの弾む音が微かにもれていることに気づいた。

（・・・誰か居るのか？）

そつと隙間から覗くと、そこに樋口羽稀は居た。

目を伏せて遠くを見つめるその横顔は、切なく、儚く、美しかった。さらさらの髪の間から見える長いまつげは光を帯びてキラキラしている。空間が他とは全く違っていて、誰も近づけないような感じだった。

私はすっかり彼に目を奪われていた。

（綺麗な男の子・・・）

目の前の彼は、ふつと目を細めて微笑むと、緩やかにボールをリングに向かって投げた。

（あ・・・）

ボールはそうなる事が自然であるような最もらしいカーブを描いて、リングに吸い込まれていった。

私が慌てて視線を戻した時にはもう、そこに彼は居なかった。

（え・・・）

勢いよく体育館のドアを開けて中を見渡したけど、幻だったかのようにならで人の気配がしなかった。

ボールの弾む音だけが響く体育館で、私はしばらく動けなかった。

時折みせるあの遠くを見つめるような目。あれは、遠くにいる水無月を見ていたんだ。

そう思うととても苦しかった。

私は水無月の事を見つめてる樋口を好きになつたんだ・・・。
最初から・・・

「樋口」

紗織は何かを決心したようにキッと顔を上げると、正面から羽稀を見た。

「ん？なんだ？」

「私・・・私ね」

「藤峰・・・？」

羽稀は少し戸惑った。

紗織がいつになく女らしかったからだ。濡れた瞳、ほんのり染まった頬、もどかしく舌をもつれさせ、喋ろうかどうか迷っているらしい弱々しい様子。

俯き、眉をひっそりと寄せる彼女はなんとも愛らしい。

いつもは男のように振舞っていてもやはり女だったのだと、認識させられる。

「私、樋口のこと・・・」

時が止まる。

第12話：存在

先ほどからうるさい程鳴り響いていた蝉の声が遠くに消えていく。

「私、樋口のこと・・・」

言ってしまえ

楽になれる。このままもどかしい思いを抱えているよりも言ってしまった方がいつそ楽だ。

言ってしまおう

目の前の鈍感男が私の思いに気づくことはない。

このままじゃ切なくてたまらない

好きなだけでいられたら幸せだったのに

「・・・？」

好きだ

「・・・す」

ガチャッ

玄関の扉の開く音がした。茗が戻ってきたのだ。

「お、飲み物がきた」

待ってましたとばかりに玄関の方に向かう羽希。

「あつと・・・。で、藤峰なんだって？」

この、鈍感男め

「・・・、別にっ。今日はありがとっ」

「どーいたしまして」そういつて無邪気に笑う羽希は子供のようだ。

諦めない、チャンスはまだあるんだから

「・・・茗」

「なあに？」

「なんか、増えてないか？」

「気のせい、気のせい」

「いや・・・」

「増えてる」

「増えてるな」

「すみません、増えてます・・・」

みんなの指摘に申し訳なさそうに答えたのは眼鏡の男。

楓宗介。生徒会長である。

茗が出かけた帰り道に生徒会長とばったり会い、勉強会中だという
と「ご一緒してもよろしいですか？」と聞かれたので「いいよー」
と軽くOKしたらしい（話を要約するところというわけだった）

「樋口くん、しばらくは僕が代わって藤峰さんに教えますので、休
んでいて構いませんよ」羽稀はそれを聞くと待ってましたとばかり
に目を輝かせた。

「ああ、さんきゅー。助かるよ」

まあ、あと1時間もすれば、こいつも俺と同じ状態になるだろうな
とりあえずカラカラの喉を潤そうとキッチンに入ると、すでに茗が
氷をたっぷりいれたグラスに飲み物を注いでいるところだった。

「はい」

茗はにこりと笑って冷たそうなグラスを俺に渡した。

茗の笑顔はいい

茗の泣き顔はほとんど見たことはないけれど、茗は笑顔の方が絶対
いい。

でも時々思う。辛いことがあっても人前では泣かない茗は、苦しい
時一人なのではないかと。茗にとって俺は頼られる存在でありたい。
俺は茗に頼られているのだろうか？

そんな思いをのみこむように、俺は一気にグラスをカラにした。
よく冷えたジュースがのどを通っていく感覚は、何とも言えず心地
よい。

グラスを置くと茗は（俺にしか聞こえないような声で）生徒会長が
教えてくれてる間は私の羽稀だね、と悪戯っぽく笑った。楓をあつ
さり入れたのはそのためか。理由がわかるとなるとも簡単なことだ。
俺は茗を抱きしめてやりたい衝動に駆られたが、リビングに二人が

居るので必死にこらえ、そのかわり茗の長くてキレイな髪をくしゃくしゃに撫でてやった。

柔らかい茗の髪はすぐにアトがついてしまう。

「バーか」俺がそういうと茗は口を尖らせて文句を言おうとする。

「いつだって俺はお前のもんだよ」

そういうと茗は文句を言えなくなってしまう、照れたようにはにかんで「知ってる」といつて笑った。

そんな茗を見ると、心にストンと、好きだという気持ちがおりる。いつまでも側にいたいと心の底から思った。

第13話：恋愛注意報

「お腹空いたねえ」

勉強中（正しくは勉強してるのは藤峰だけだったが）そう言い出したのは茗だった。

時計を見ると時間はちょうど12時ころだった。

「そういえばそうだな」

そういわれてみると急にお腹がすいてきた。

「どこか食べに行きますか？いまから作るのも面倒でしょうし・・・」

「じゃあ、近くのアミレス行くか」

沙織はやつと訪れた勉強からの解放のチャンスを逃すまいと、素早く立ち上がって玄関へと走った。

「じゃあ財布とりに行かないと行けないから家によっていいか？」

羽稀は朝は寝ぼけていたので財布を持ってこなかったことに改めて気づいた。

みんなでゾロゾロと外に出ると、羽稀の家の前に人が立っているのが見えた。

「樋口、家の前に誰がいるみたいだけど」

「あ、ほんとだ」

目を凝らし、少し近づいただけで誰かすぐわかった。

短い髪、背は高くガツチリとした筋肉質の男。

夏を最も夏らしく感じさせる男。

太陽の如く暑苦しい熱血野郎。

羽稀はみんなを無言で促し、気づかれないようその場を立ち去ろうとした。

が、時すでに遅し。

「ひーぐーちいー！！！！」

羽稀に気づいたその男は、大声を出しながらもうスピードで駆け寄

ってくる。

すぐ目の前にくると羽稀の肩をガッチリと掴む。

「わーっ！部長、すみませ・・・っ」

「俺を助けてくれ！！」

何をやったか見当はつかなかったが怒られるとばかり思っていた羽稀は呆然とした。

「は？」

男の中の男を目指す―（目指しているらしい）部長が助けを求めてくるなんてありえないと思っていたからだ。理由はそれだけではないが。

羽稀はこの状況を一瞬にして分析した。

「部長。何があったかわかりませんが、僕たち今から近くのアミレスに行くところだったので、部長も一緒に行きませんか？そこで話を聞きますよ」

羽稀は今まで見せたこともないような笑顔で部長の肩をポンツとたたいた。

「樋口・・・！お前はなんていいやつなんだ！！」

感無量とばかりに羽稀を力いっぱい抱きしめると、行くぞ！！と先頭を切ってアミレスに走っていった。

「樋口って意外といいやつなんだな」

沙織は感心といったような口調でからかうように言う。

「失礼だな。俺たちも行くか」

「樋口くん、財布は取りに行かなくていいんですか？」

「ああ、いいのいいのもう必要なくなったから」

羽稀は上機嫌そうに晴れ晴れとした笑顔でそういった。

「樋口・・・、あんた意外と悪いやつだな」

沙織は羽稀の意図が読み取れると、がっかりしながらもやっぱりとも言つように呟いた。

「失礼だな、別に部長のことを歩く財布だなんて思っていないぞ」

「なーんだ。私も財布置いてくれば良かった」

「そういう問題じゃないだろ」

「茗さん・・・」

生徒会長は苦笑交じりに肩を落とした。

お昼時にも関わらずファミレスは空いていたし、クーラーがよく効いていてとても気持ち良かった。

「で、どうしたんですか？」

羽稀はメニューを広げながら、さも興味が無いとでもいうように「（実際興味はちよつともなかった）そう言った。

部長は水をごくごくと飲み干して、一息ついてから喋り始めた。

「実は・・・」

「明後日のテスト勉強が上手くいかなくて困っている！」
ポンと手を打ってそう言ったのは茗。

「そうなんだ・・・赤点と俺は友達・・・って違う！」

「このままではジャイアンかゴリって言うあだ名がつくのも時間の問題だと心配している」

と沙織。

「そうそう、バスケットやっててゴリラみたいだからあだ名はゴリって違う！」

「かっぱえびせんが美味すぎる」

と羽稀。

「やめられない、止まらない。って違う！」

「わかりました！どうしたら腋臭が治るのか悩んでるんですね！」
と楓。

「そう！もう、ほんと違う！」

この人面白い・・・。

「す・・・す・・・好きな人が出来たんだ！」

そう小声で叫ぶとガラにもなく赤面する部長。

そして羽稀の水をとってまた一気に飲み干した。

「え？バスケットが恋人つてくらいバスケット命の部長がですか？

あ、すみませーん。注文いいですかー？」

羽稀は近くにいるウェイトレスを呼びつけた。

「でもまあ、誰だって恋はしますから珍しくないのでは？僕、日替わりランチセットでお願いします」

と楓。

「えー！それってもしかして初恋って感じですか？私カルボナーラスパゲティと苺のパフェ」

と茗。

「この年で初恋なんてあらゆる意味で天然記念物ですね。あたし、オムライス」

「相手は誰なんですか？俺ステーキセット。ご飯大盛りで。あーあとフライドポテトも」

「い・・・い・・・唯原^{いはら}まなみさんだつ。み、水のおかわり下さい」

「唯原部長ですか？僕、同じ部活ですよ」

「そ、そうなのか？」

「パアツと明るい表情になる部長^{ゴロ}」

「私も同じ部活ですよー。きっかけはなんですか？」

楓と茗は知り合いの名前が出てきたせいか、興味を示したが、羽稀と沙織は面倒なことになりそうだとばかりに死んだ魚の目をして遠くを見つめている。

「昨日俺は部活の終わりに脚をくじいた後輩を保健室に連れて行っただが生憎先生が居なかったのだ。後輩を椅子に座らせ、キョロキョロしているをついたての向こうのベッドから誰かが起き上がって俺に声をかけた…それが彼女だった」

第14話：黒髪天使

「部長すみません…」

足を引かず部長に担がれた後輩は申し訳なさそうに呟いた。

「なんだこれぐらい、気にするな。早く治して次の試合に備えろよ」

俺は後輩を元気づけてやろうと大袈裟なくらい歯を剥き出しにしてニカツと笑った

「はい…！」

保健室の扉を開けると先生の姿はなく、誰もいない様子だった

「む…、ここに座っていたまえ」

後輩を椅子に座らせ、保健の先生を探しに行こうとした時、

「今先生居ないわよ…」 ついたての向こうのベッドから急に声がしたので驚いて見てみると、ちょうどベッドから体を起こす女子生徒がいた。

その瞬間俺の頭はフリーズした。

腰の辺りまでぐつと真っ直ぐ伸びた黒髪。生気を感じさせないほど白く滑らかな肌。切り揃えた前髪から覗かせる切れ長の瞳。濃紺の制服から伸びるスラリとした手足。右目の下に控えめにあるほくろ。

…俺は彼女の何もかもすべてに目を奪われた

「どこか…具合が悪いのかしら…？」

彼女の声は何の混じり気もなく透き通っている
控えめだが凜としてよく通る声だ

「え…ああ、湿布薬をとり…いやっ俺ではないのだがっ後輩が足を…」

「あら…あなたではないの…」

彼女はそう言うまゝで自分の部屋であるかのように、迷うことな

く棚の引き出しから湿布薬を取り出してきた。

「これを…貼ってあげるといいわ…」

そう言って彼女は上品に笑って俺にそれを渡した

「す、すまん」

「いいのよ…じゃあ私はもう行くわね…」

彼女は足音を殆どたてずに保健室をでていった。

彼女が去ったあと俺は呆然と立ち尽くしたがハッとなって使用履歴を見た。

「3年…帷原まなみ。まなみさん…」

彼女の事が頭から離れなくなつて俺は彼女にもらつた湿布を後輩の足とほてつた自分の額に貼つた。

…

…

「…というわけだ」

部長はそのときの事を思い出すようにうつとりとしている

「へえ…あ、ステーキセツト俺のです」

「彼女こそ大和撫子にふさわしい女性はいない！すまんが、水をください」

部長はもう何杯目だろうと思われる水を飲み干した。

「彼女の笑顔はまるで天使か女神のようだっ」

「いやいや！部長が笑ったとこみたことないよ、私。…やっぱリミートスパゲティにすればよかった！」

茗は入部したときのまなみを思い出してみたがどう頑張つても無表情の顔しか思い出せなかった。

「帷原部長はどんなときでも無表情ですよ。あ、樋口くん紙ナプキンとってください」

と口を拭きながら楓も苦笑気味だ。

「彼女はきつと体が弱く病気がちなのだ！よく保健室にいるらしい」
注がれたばかりの水を一気に飲み干しながら熱く語る部長。

「俺がサボりにいくと大体帷原先輩いるけど、具合悪いんですか？
って聞くと涼しい顔して「さぼりよ・・・」って言うんだよな。フ
ライドポテトまだですかー！」

「お前ら・・・話聞く気ないだろ・・・っ」

さつきから水しか飲んでない部長は、色気より食い気とばかりに食
べいそしんでいた4人を恨めしそうに見た。

もりもりと食べていた4人は手を止めて笑顔をつくり「そんなこと
ないでふ」と言った。

「まあ、いい！とにかく樋口！協力してくれ！バスケットで今ま
で恋なんてしたことないんでどうしたらいいのか全くわからん！」
一通り食事を終えた一行は（ここにきて）ようやく本腰を入れて話
を聞くことにした。

「羽稀！。協力してあげなよー。なんか可哀想なんだけど」

茗は部長の暑苦しすぎる顔を同情の眼差しで見ている。

（俺はそっちの方が可哀想だと思ったけど）

「まあ・・・いいですけど」

しぶしぶ俺がそういうと今まで以上に目を輝かせて、部長は俺に手
をがっ握った。

「頼んだぞ！樋口！デートの約束を取り付けてほしい！」

「はあ？」

「お前らも一緒にグループデートってことで約束を取り付けてくれ
！」

・・・ここにいるメンバーって・・・

波乱と疲労の予感がした。

第15話：夏バテバテ

「いやー終わった終わった」

「終わったね」

「終わったな」

「終わりましたね」

「いや！始まりだ！」

おばさんのバーゲンセールかってくらいぐい割りこみ、テスト終わりのみんなの穏やかな空気に熱風をねじ込んだのは、誰が言ったか人よんでリアルジャイアンことバスケット部長。

「テストも終わったしたまにはみんなでご飯食べようよ」という茗の提案に藤峰が珍しく異論を唱えなかったのには理由があった。

茗はさほど気にしていない様子だったが楓でさえも顔をひきつらせて、わざとらしいくらい「いいですね！日陰なら風もあつて涼しいですし行きましょう！」なんて頷いていた。

そうして昼休みにわざわざ屋上で弁当を広げた理由はただ一つ

リアルジャイアン、だ。

しかしながらそんな浅はかな逃亡はあっさりと失敗してしまったようだ。

こうして回想してみているがぼんやりとした視界の中ではリアルジャイアンが汗びっしょりで息を切らせてこちらをみている。

観念するしかないらしい。

「そうですね…部長。まだまだ始まったばかりでした…」

「な、なんだ樋口！わかってたのか！」

「もちろんです部長！まだ夏は始まったばかりです！」

「恋だ！！」

大袈裟にボケてみたのにこの始末。

とりあえず汗を拭くかノリツツコミをするかどちらかにして欲しいと心の中で呟く。「部長…面白くないです」

「何の話だ！」

部長の顔をみていると食欲が失せるのは何故だろう？なんて、そんなことを考える間もなく部長に肩を掴まれる

「樋口！デートだ！」

「すみません…部長。俺そういう趣味はないんで…」

「だから何の話だ！」

藤峰と楓は部長と目を合わせないようにしながらもくもくと弁当を食べている。

茗はと言うとお弁当を広げもせず部長をじっと見つめている。

「部長さん…愛に性別の壁はありません！」

「ボケ殺しか！」

いえ、部長。

茗は天然です。

「冗談ですよ。で、リアル鬼ごっこをいつやるかって話でしたっけ？」

「そんな話をいつした！だからまなみさんとのデートの件だ！」

俺はお弁当を頬張りつつ、部長の眉毛をみてカリントウを思い出しながら「そーいえばそんな話もしましたね」と惚けてみせた。

「部長さんはどんなデートしたいんですかあ？」

ようやく弁当をあけ、卵焼きをついばみながら言った。

恐らく部長の恋の悩みに対して一番真剣なのは茗だろう。

どんなにくだらないうちでも真剣に向き合う茗は純粹で無垢だ。

そんな茗の卵焼きを一つ横からとって食べると茗は小さくあつ、と言った。

茗の卵焼きは甘くてちよつと焦げてた。

これは最近になって知ったことだが茗はあまり料理が得意ではないらしい。

でも俺は茗の料理が嫌いではない。なんでだろうねって話を茗としたけど、愛がこもってるからだよってはぐらかされた。

そしてこれも最近知ったことだが実は俺の母親が開いている料理教

室に茗はたまに行ってるらしかった。

それを聞いた時バカだなあとはいつきり笑ってやった。

ところでなんでこんな回想をまたお披露目しているかという理由
は一つしかない。

先程から繰り広げられている部長の理想のデート論を聞くのに飽きたからだ。

（正しくは、最初から聞いてなかったんだけど）

「…というわけでまなみさんとデート、デートっていうかまさしく
デートなんだけど…っていうかデートって照れるな…で、デートな
んだがな！」

何回デートっていうんだ。「わかりました、部長。惟原先輩に聞いて
みましょう」

「あ、じゃあ私今日の部活の時に聞いてみるよ」

「そ、そうか？じゃあそうしてくれ！」

面倒だったからそういったのになんだかまとまったようだ。

部長は上機嫌で昼休みの終わりの予鈴とともに走り去っていった。

「あ、話まとまったの？」お腹がいっぱいになった藤峰は眠そうに
目を擦っている。

「…お前な」

次こそは貴重な休み時間を部長に潰されないようにしようと心に決
めながら食べかけの弁当をカバンにしまい、部活以外で部長に会う
のは思っているよりも体力を使うな…と思ってる途中でもしかした
ら俺は部活の時余計な体力を使っていたのかな…なんて漠然と思い、
一人静かにテンションを下げながら、部長がジャイアンならさしず
め楓はデキスギくんだな…なんてほんとにどーでもいいことを考え
ていた。

第15話：夏バテバテ（後書き）

最近になって思うことは部長の名前がまだ登場してないけどはたして出した方がいいのかってことと、部長のセリフには「！」が多いってことです

そしてキャラクターが勝手に動いてボケるんだけどイマイチツッコミが安定してないってことです

まー名前は次回くらいにだすかなーなんてぼんやり思ってます

第16話：恋愛テクニク

「だから…吊橋効果よ…」

「…吊橋効果ってなんですか？」

体育館の外も中も暑いというのに、まなみは汗一つかかず涼やかな表情でそう言った。

今から10分程前…

茗は放課後の部活を控えていつになくソワソワしていた。

それというのもお昼休みにバスケ部長と、まなみの行きたいところを聞く、と約束したからだ。

茗はまなみがどこに行きたがるのか実際興味があつたので、放課後までの授業中、自分なりにあれこれ予想して楽しんでいた。今のところ映画館が茗の中では有力候補だった。

理由は「座ってられるから楽でしょう…？」って言いそうだから。

それに、彼女は明るい光よりも暗闇が好きなのではないかという気がしていたからだ。

ようやく放課後になって、茗がいつもより早足で行くと、まなみはもうそこにいた。

椅子に座って窓からもれる光を浴びている様子はまるで光合成でもしているかのようだ。

「…珍しいわね」

茗の気配に気づくと、まなみはスッと目を開けた。

「寝てたんですか？」

「…瞑想よ」

「瞑想ですか」

まなみは茗にとってに限らず、つかみどころのない人だった。

「つかぬことをお伺いしますが」

「…なぜ粗品を渡す時ってつまらないものですがって言うのかしらね…」

「へ？」思わぬ返しをされて茗はすっとんきょうな声をあげたが、まなみはそんな茗を特に気にする様子もなく、独り言のように言葉を落とす。

「本当はつまらない物じゃないのならそれでいいかもしれないけれど…、本当につまらない物だったらきつとがっかりしてしまうのでしょ…うね…。で、水無月さん…つかぬことって何かしら？」

茗はまなみの眼差しに妙な圧力を感じたが（具体的に言うと、「あなたの話が本当につかぬことだったらどうしましょうね？」って言われている気がしたが）思い切って口を開いてみた。

「帷原部長って付き合ってる人いるんですか？」

「それって人間で？」

「も、もちろんです」

人間以外で他に何が可能性を秘めているのだろうか？

「じゃあ、居ないわ…」

「じゃあ…ってなんだ」

って思ったけど茗は特にそこは掘り下げなかった。

「どんなデートが理想ですか？」

「水無月さん…吊橋効果よ…」

「吊橋効果…レインボーブリッジってことですか？」「ふふ…あなた、天然ね？」

「…人工ではないと思います」

天然だと言われたのでそう答えたのに、まなみはなんだかうつすら笑っている（ような気がする）

「だから…吊橋効果よ…」「吊橋効果ってなんですか？」

「水無月さん…私を口説きたいなら吊橋効果でもつかってみなさい

…」

茗は何を言われているのか全くわからなかったがとりあえず頷いた。そしてちよつとしてから気づいた。

「私が帷原部長を口説くんですか？」

「あら…違ったの？」

吊橋効果と妙な誤解で茗は思わず「私が好きなのは羽稀です！」と言いつうになつて口をつぐんだ。

前に沙織に「あんたさ、あんまり羽稀の彼女面すんじゃないわよ」と言われたことがあつたからだ。

その時はまた意地悪でも言っているのかと思つたが、すぐにそれは沙織なりの優しさだということがわかつた。

羽稀は学校では王子様とかアイドルみたいな立場だから、恋人とわかれればイジメにあつてしまうので、忠告をしてくれたのだ。

沙織は口も態度も悪いが、なんだかんだ優しかった。茗はクラスメイトの美沙里よりも沙織の方が仲良くなれると思つていたし、実際仲良くなりたかつた。

そんなことをもやもやと考えていたら、座つていたはずのまなみはいつの間にか立ち上がつて、茗のすぐ目の前にいた。

「あなたでないのなら…静くん…？」

「静くん…？」

聞き慣れない名前を言われて茗はおうむ返しした。

「ほら…さつきからあそこにいるじゃない…。河合かわいしずか静くん」

まなみの指さす先には、隠れるはずもないのにコソコソとこちらを伺うバスケ部長の姿。

すぐうしろには羽稀と沙織が隠れようとせずこちらを見ている。

「部長…そんな名前だつたんですね。」

「私はてつきり合田武だと思つてたけどな」
ごうだたけし

ニアピン。

茗は心の中でそう呟いた。

第17話：絶叫ランド

「静くん」は名前とは正反対のうるささで、「ぬを！バレていたなんて！」と、扉の陰から（実際は扉は少しも静を隠していなかった）顔を赤らめながらまなみの前に出た。

「先日保健室でお会いしたわね…」

他人に興味がなさそうなのに、まなみが違うクラスの静の名前をちゃんと知っていたことや、保健室で遭遇したことを覚えていたことに、楓と茗は少なからず驚いた。

「何か用事が…？」

まなみはどうやら静が言いたいことが全てわかっているようなのに、わざとらしくそうきいた。

「ま、まなみさん！お、俺と！で…で…で」

頑張れ部長！

みんなが初めて部長を応援した瞬間だった。

「俺とデートしてくれ！」「いいわよ…」

あっさりしてるー！

誰もがそうツツコミたかった瞬間だった。

「日時と場所はまた決まったら教えてちょうだい…。休日ならいつでも空いてるわ…」

部長は完全にピヨピヨとハートがとんでいるような顔で首がとれそうなくらい勢いよく縦に振っている。

気づくと演劇部の部員らしき人達に囲まれていて、静に対してしきりに拍手をしていた。

「さあ…楓くん、水無月さん…部活を始めましょう…」

部長はピヨったまま、羽稀と沙織に引きずられて体育館をあとにした。

その週の日曜日ー

「なんで遊園地なの？」

俺はどう考えてもまなみの行きたいところ「遊園地に結び付かないことに疑問を感じていた。

早く着きすぎてしまったので、みんなを待つために入り口付近においてあるベンチに座りながら俺は茗にそう尋ねた。

「ずばり、吊橋効果だよ」

満足そうにそう答える茗は膝が見え隠れするくらいのチエックのスカートに程よくフリルで飾られたトップスで身を包み、普段よりも僅かにオシャレをしている。

吊橋効果という言葉で、昨日覗いた茗のパソコンに残っていた検索履歴のワードを思い出した。

可愛すぎる。

10分も待たないうちに遠くから人影が見えてきた。

100m以上先にいても誰なのかわかる。

バスケット部長…もとい河合静だった。

俺がアドバイスをしたおかげか、いつものジャージ姿からは想像もつかないくらい、センスのよい格好をしていた。

…髪型以外は。

短すぎてワックスでいじる余裕もない部長の髪は、自然乾燥されて重力の影響を全く受けずに天に向かって手を振っていた。

当の本人は全く気にしてしない様子だったが、俺が気になるので自分がかぶっていた帽子をかぶせることにした。

それからしばらくして藤峰と楓が来て、まなみは時間ピッタリにやってきた。

黒のワンピースはまなみの白い肌によく映えていた。

「…おはよう。静くん」

「お…おはようっ、その服、とても似合ってるな」

「…ありがとう、あなたも似合っているわ…」

初々しすぎるそのやり取りをみているとこちらが恥ずかしくなってくるので、俺は早く入場するように部長を急かした。

「何に乗るの？」

あたしがパンフレットをみんなに渡すと、バスケット部の部長が明らかに青ざめたのがわかった。多分それに気づいたのはあたしだけじゃない。

この遊園地は、絶叫マシンの宝庫と言われるくらいいろんな種類の絶叫マシーンがあるとところとして有名な遊園地だ。

この計画が決まった翌日から水無月が真剣な顔して吊橋効果って何？って聞いてきたところから察するに、だからこそこの遊園地を選んだのだろうけど、私はどう考えても演劇部の部長の澄ました顔が歪むところなんて想像できなかった。

逆にこの大男が恐怖に叫ぶところが容易に想像できる。

…とはいえあたしにもこの場において一つだけ克服できないものがあるんだけど。

それについてはとりあえず考えないことにしようと思う。

想定外だ…

これほどまでとは…

話には聞いていたがパンフレットを見て俺は愕然とした。

端から端まで絶叫マシーンだらけだ。横をチラリとみやるが相変わらずその表情からは感情が読み取れない。

目の前を見ると、異常に目を輝かせるそいつがいて俺はギョツとした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0655a/>

僕等　～約束～

2010年10月28日04時00分発行